

第三者返答に対する態度とパーソナリティとの 関連について

○今井結雅

(山口大学大学院教育学研究科)

本研究の目的

我々は日常生活において様々な相手とコミュニケーションをとり、コミュニケーションの方法を調整している。これらの調整は適応的に機能する場合もあるが、話し手の主観による調整が話し相手にとって適切な調整になるとは限らない。話し相手にとっての不適切な調整の一例である第三者返答は、人の見かけの印象などから、その人との意思疎通が問題ないにも関わらず無視して、その人と一緒にいる人に返答することであると定義され、第三者返答の主な要因について、話し手の意思疎通に関する不安があることが指摘されている(オストハイダ, 2005)。つまり、他者との意思疎通に不安を抱きやすい人は第三者返答を行いやすいのではないかと考えられる。そこで本研究では、第三者返答に対する態度と不安傾向や過剰適応傾向、強迫傾向などのパーソナリティ要因が第三者返答の生起に及ぼす影響について検討する。

方法

調査参加者 212名を対象者として質問紙調査を行った。有効回答数は204名(男性86名, 女性117名, その他1名)であった。有効回答者の年代は10代104名, 20代100名であった。

質問紙の構成 調査で使用した質問紙は、フェイス項目, 4つの第三者返答場面について評定する課題項目, 評価懸念尺度, 強迫傾向尺度, 特性不安尺度の5項目であった。

結果

フェイス項目を除いた4項目の探索的因子分析で得られた第三者返答場面について評価する4尺度を場面別尺度とし、評価懸念尺度・不決断尺度・強迫的思考尺度・特性不安尺度の4尺度をパーソナリティ尺度とした。パーソナリティ尺度が場面別尺度に与える影響を構造方程式モデリングにより検討した。尺度の評定値の合計を項目数で割ったものを尺度得点とした。各パス係数をFigure1に示す。適合度指標は CFI = 1.000, GFI = .982, AGFI = .964, RMSEA = .000 であった。



† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Figure1 パーソナリティ尺度が場面別尺度に与える影響

パーソナリティ尺度得点については、どの尺度からも場面別尺度得点への影響はみられなかった。第三者返答場面について評価する課題において回答を求めた自由記述項目では、外国人の言語行動に合わせた調整を行うべきとする意見や、外国人には英語で返答した方がよいとする外国人の母語や日本語能力についての想定を反映した意見、礼儀として話しかけてきた外国人本人に返答すべきとする意見がみられた。

考察

本研究では、第三者返答の主な要因として指摘されている「話し手が抱く話し相手との意思疎通に関する不安」に着目し、パーソナリティが第三者返答に対する態度に及ぼす影響を検討した。その結果、パーソナリティが場面を設定した第三者返答に対する態度に及ぼす影響は本研究ではみられなかった。これらの分析の結果から、第三者返答場面に対しての態度には個人のパーソナリティ要因ではなく、外国人や自分の母語についての想定などの言語社会的要因が大きく関係している可能性があると思われた。

引用文献

オストハイダ・テーヤ(2005). 聞いたのはこちらなのに…—外国人と身体障害者に対する「第三者返答」をめぐる— 社会言語科学, 7(2), 39-49.

謝辞

本論文の作成にあたり、終始丁寧な指導して下さいました押江隆先生に深謝の意を表す。